

自学自動の伝統を具現化する知の拠点 —日本女子大学新図書館開館—

中 曾 根 緑 (日本女子大学図書館)

1. はじめに

日本女子大学(以下「本学」)は、1901年、日本女子大学校として開校し、現在、キャンパスは東京都文京区目白台、神奈川県川崎市多摩区西生田の2ヶ所にある。目白キャンパスに家政学部、文学部、理学部の3学部と大学院4研究科があり、西生田キャンパスに人間社会学部と大学院1研究科がある。学生数は両キャンパスを合わせて約6,600名である。加えて家政学部に通信教育課程を有している。

図書館は目白、西生田のキャンパスにひとつずつあり、2018年度までの施設概要は次のとおりであった。

<目白>

延床面積	4,752.27㎡
階 数	地上5階・地下1階
閲覧座席数	602席
収容可能冊数	453,806冊
開 館 日	1964年6月23日
施設形態	複合棟

<西生田>

延床面積	1,876㎡
階 数	地上3階・地下1階
閲覧座席数	258席
収容可能冊数	205,778冊
開 館 日	1990年4月10日
施設形態	複合棟

2018年度末の蔵書数は目白65万冊、西生田24万冊、雑誌タイトル数は目白15,500種、西生田4,800種であり、資料配置は、目白では図書館と研究室に分散管理、西生田では図書館集中管理を基本としている。

2019年4月、約半世紀ぶりに目白キャンパスの図書館を新設した。新設決定までの経緯、新設コンセプト検討の過程、新設後の状況、今後の課題

を紹介する。

2. キャンパス構想の中での図書館新設

2019年3月まで使用した目白キャンパスの図書館(以下「旧館」)は、1964年に創立60周年記念事業として建設された。第6代学長上代タノの確たる理念に基づき、当時としては先進的な開架式図書館として開館し、増築と幾度かの改修を経て使用されてきたが、約50年の歳月を経て耐震性、老朽化、狭隘化、機能、動線等への対策が必要な状況となっていた。

2011年度、本学は創立110周年を迎え、創立120周年に向けたVision120を発表、その中で2021年に西生田キャンパスの学部・大学院を目白に移し、4学部・大学院5研究科を目白キャンパスに統合することを表明した。キャンパス統合により、目白の学生数は約2,000名増加することになるため、教室・研究室等の新設を含むキャンパス構想が動き出すこととなる。

Vision120実現のため、理事会の諮問機関である学園総合計画委員会のもとに、教育研究改革、キャンパス構想、財政、学修支援等の部会が設置され各種検討が進められていたが、2013年度、学修支援部会に、キャンパス統合に向けた今後の望ましい図書館のあり方(図書館構想)の検討指示があった。部会では部会長(理事)、図書館長、図書館・情報学教員、図書館職員をメンバーとする図書館グループを立ち上げ、図書館に関する集中討議を行った。図書館は改修または新設のいずれとすべきかの検討から始め、結果としてVision120のシンボリック存在として新設すべきであるとの結論に至り、基本コンセプト、基本機能、立地・規模、施設・設備の要件等を取りまとめ報告書を提出した。

2014年、本学は、キャンパスマスタープラン案

作成のため妹島和世建築設計事務所と全体構想の設計契約を結んだ。同年11月、目白キャンパス「グランドデザイン」が発表され、複数の新設建物のひとつとして図書館の新設が明らかとなった。

3. 自学自動の実践の場としての図書館

Vision120では、創立者成瀬仁蔵の創立の精神を継承し発展させるとともに、社会を支え国際社会をリードする人材を育成するために、本学の持つ力を創立の地である目白に結集し教育にあたることになった。

そのような本学の方向性の中で行われた学修支援部の図書館構想検討では、まず、これまでの図書館活動の礎としてきた旧館建設時の建設趣旨をかえりみた。当時の学長上代タノは、図書館のあるべき姿を求め欧米諸国の大学を視察し、母校ウェルズ・カレッジにおいて“Students Centered Library”と呼ばれる構想に出会い、これこそ本学図書館の方向性と確信し旧館建設の準備を進めた。上代は旧館の開館あいさつの中で、「本学の伝統的な教育理念である『自主性と創造性』を学問研究に人間形成に徹底し(中略)学生相互間の自由討議、殊に学生自らテーマを持って自主的な独立の研究の機会を持てるよう、その機能を果たす近代的図書館が必要である」¹⁾と述べている。

折しも、学士課程教育の質的転換(課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)等)、学生の主体的な学びのベースとなる図書館の機能強化(学習支援及び教育活動への直接の関与等)が示される中、本学の教育理念、旧館建設時の考えは、現代における学生の主体的な学び、能動的学修の方向性の中でも色褪せることなく継承・発展すべきものであることが確認された。

旧館の蔵書に関する基本方針であり今日まで保持してきた全開架方式については、自動出納書庫導入可否の検討を経て、本学図書館の特色として新館でも受け継ぐこととした。

次に本学図書館の現状と課題を再確認した。旧館は建設当初からグループ学習のための共同研究室を備え、2015年には閲覧室と事務室を改修して

小規模なラーニング・コモンズを新設していたが、本学の教育プログラムとの連携を一層深め、多様な学修スタイルに対応できるスペースの拡大、さまざまな学習人数への対応、情報環境の改善、長時間滞在を考えたリフレッシュ環境の整備、蔵書収容力向上などが必要な状況であった。

学修支援部会での検討と同時期に、図書館にてWebアンケート「LibQUAL+」を実施し、学生、教職員の図書館への要望、意識を調査した。「LibQUAL+」のコア設問は、三つの側面(サービス9問、蔵書・情報8問、場所5問)で構成され、各設問に「許容できる最低限」、「希望」、「実際」という3種類の観点から1～9までの点数で回答を得るものであるが、学部生は「場所>情報>サービス」、大学院生は「情報>場所>サービス」、教員は「情報>サービス>場所」という傾向であり、学部生にとって場所への要望が高いことがわかった。また立場を問わず、図書館への基本的な期待は蔵書・情報の充実にあることを再確認することができた。自由記述欄では施設・設備に関する意見が最も多く寄せられた。

準備期間を含めると約3年の検討を経て、新図書館(以下「新館」)の基本コンセプトは次のように集約された。

- ・ 自念自動の拠点として学生の知の創造活動の場を提供する
- ・ 自学自動の自発的学修を支援する
- ・ 開架を重視し蔵書に親しめる
- ・ 学術情報の拠点として印刷媒体・電子媒体資料を並行してサービスする
- ・ 文化的交流、思索、憩いの場があり、豊かな人間性が育まれる知的広場に
- ・ 学術成果を公開し、地域に貢献する

自学自動、自念自動は、本学の創立者成瀬仁蔵の教育方針を表す言葉であり、Vision120の教育改革の骨子にも「自学自動、自念自動を实践する女子教育」として掲げられている。新館は、本学の教育理念の実践の場、学生が創造性や主体性を育み他者と共生を図り実力と信念を養う場であり、そこには人的支援があり、学術情報の充実が図ら

れ、利用者自らが自由に蔵書を選ぶことができ、専門分野を超えた人々の交流の場でもあるべきとの想いが込められている。

4. 新図書館の状況

このたびのキャンパスグランドデザインならびに各建物の設計者である妹島和世氏は本学の卒業生である。本学の教育理念をよく理解する卒業生が、現在のそして未来の学生のためにどのような図書館を形づくるのか大きな期待がもたれた。

4.1 施設概要

新館の施設概要は次のとおりである。

延床面積	6,607.48㎡
階数	地上4階・地下1階
閲覧座席数	650席
収容可能冊数	700,000冊
開館日	2019年4月3日
設計監理	妹島和世建築設計事務所



図1 新図書館外観

清水建設(株)設計JV

施工 清水建設(株)

施設形態 独立棟

図書館新設と同時に、図書館前に学生滞在スペース棟198.00㎡が新設された。

構造計画概要、設計主旨、各階平面図、断面図は本学図書館ホームページに建築概要²⁾として掲載している。

4.2 用途別面積・割合比較

表1は文部科学省・学術情報基盤実態調査〈大学図書館編〉(以下「調査」)の用途別面積の考え方をふまえ、旧館・新館の用途別面積と全体に占める割合を比較したものである。サービススペースの「その他」とは閲覧、視聴覚、情報端末に含まれないサービススペースであり、調査ではここにラーニング・コモンスを含むこととされているが、表1では別に仕分けしている。

閲覧スペースの面積は旧館の2倍、情報端末スペースは1.46倍、ラーニング・コモンスは1.94倍となっている。全体に占める割合もこの3スペースを合わせて旧館では15.97%であったものが新館では23.06%と増加した。サービススペースの「その他」の減少が目立つが、これは旧館と新館における面積区分の違いによるものである。旧館ではここに教員の依頼により図書館員が行う授業内ガイダンス等を実施する多目的室(ガイダンスの無い時間帯は自由なパソコン利用が可能)の他、目録カードケースやコピー機付近のスペース等を含んでいたが、新館では多目的室と同様の用途で

表1 旧館・新館用途別面積・割合比較

		サービススペース					管理スペース		その他のスペース	計
		閲覧スペース	視聴覚スペース	情報端末スペース	ラーニング・コモンス	その他	書庫スペース	事務スペース		
旧図書館	面積(㎡)	592.15	56.45	63.84	103.02	271.66	2,961.57	507.18	196.40	4,752.27
	割合	12.46%	1.19%	1.34%	2.17%	5.72%	62.32%	10.67%	4.13%	100%
新図書館	面積(㎡)	1,230.07	17.07	93.00	200.00	91.80	2,961.88	334.13	1,679.53	6,607.48
	割合	18.62%	0.26%	1.41%	3.03%	1.39%	44.83%	5.06%	25.42%	100%
新旧比較	面積(㎡)	637.92	-39.38	29.16	96.98	-179.86	0.31	-173.05	1,483.13	1,855.21
	割合	6.16%	-0.93%	0.07%	0.86%	-4.33%	-17.49%	-5.61%	21.29%	

使用するレクチャールームのみを対象とした。旧館の多目的室との比較では、レクチャールームの面積は約1.47倍に増加している。

書架スペースの面積はほぼ変化がなかったが、全体に占める割合は62.32%から44.83%に減少した。収容可能冊数の変化については後述する。事務スペースは面積が旧館の約6割に縮小し、割合も10.67%から5.06%に減少した。

その他のスペースは、調査ではサービス・管理のいずれにも該当しない廊下、階段、トイレ等のスペースを仕分けることになっている。新旧比較ではこのスペースの増加が最も多い。増加理由は、旧館は複合棟であったため、図書館の用途別面積算出において、他組織と共用している機械室等は除外していたが、新館は独立棟であるため全ての機械室等がその他のスペースに計上されたことに加え、新館がスロープや階段を多用した建物であることが大きい。

学生の学びに役立つ図書館として、用途別面積割合において学生の学習・研究スペースを増加させることを目指していた。施設形態等により面積区分の算出方法が異なり単純な比較は難しいが、表1からは、全体として管理スペースを縮小しサービススペースの充実を図ったことが確認できた。

キャンパス統合を前提に作られた新館について、本来は「目白旧館と西生田図書館の合計」と新館の比較を行うべきだったかもしれない。しかし独立して運営している館ではそれぞれに必須であっても1館になった時には集約できるスペースもあることから、面積傾向の変化をシンプルに見るために、本稿では目白の新旧館の比較を行った。

4.3 主な計画要件の達成状況

図書館構想の主な計画要件の達成状況を見ていくことにする。このたびのキャンパス構想では、複数の新設建物が計画され、全ての新設建物は、全体構想の中で予算をはじめとした各種検討・精査を経て立地・規模が決定された。図書館の立地・規模は図書館構想の要件とは差異がある結果となったが、図書館単体の構想を超えた全体計画

の中で決定がなされたものである。

旧館は教室・研究室があるキャンパスの中央に位置していたが、新館は道路を挟んだ隣接地区に建設された。教室・研究室から離れたことにより図書館に向く前に諸施設の空き状況を知りたいとの声が寄せられ、Twitterによる利用状況等の発信を始めている。2019年6月末までの利用者数は前年比で約7%増加している。新館ができた割には増加率が控え目であるが、その要因のひとつとして、旧館時代は授業と授業の合間に1日複数回立ち寄っていたが、現在は一度の来館で用を済ませるような利用傾向が推察される。

4.3.1 閲覧・学習スペース

閲覧座席数は602席から650席に増加し、一人用の席、複数席の大きな閲覧机、カウンタータイプの席、館外が見える席、落ち着いた空間にある席等、利用者がその日の目的により多様な席を選択できるようになった。閲覧席の木製の机・椅子の一部は旧館のものを再利用し、新しい家具も既存家具と色調等を揃えて統一感を出している。



図2 ラーニング・commons

ラーニング・commonsの座席数は52席から74席に増加した。位置は旧館では4階の書架スペースの脇という奥まった場所にあったものを入口階(2階)に配置したことにより、アクセスがしやすくなり、スペースの認知度を高めることもできている。音のゾーニングとして、入口階(2階)は受付・閲覧カウンター、レファレンスカウンターが

あるため、声を出しても良いエリアと考え、ラーニング・コモンズもここに配置した。ラーニング・コモンズには、可動式の机・椅子に加え、電子黒板、インタラクティブ機能内蔵プロジェクタ(卓上投影用)、可動式のプロジェクタ及びロールスクリーン、スマートフォン対応ホワイトボード等の機器を備え、ノートパソコン、モバイルプリンタの貸出も行っている。大学院生のラーニング・サポーターへの学修相談もできる。

レクチャールームは利用者用の座席が20席から60席に増加し、より多人数でのガイダンスが可能となった。音のゾーニングの観点からは、静寂空間とされる4階に周囲の壁がなく設置されたため、ガイダンス等の開催時には遮音カーテンで仕切って使用しているが完全な遮音は難しい。そのためワイヤレス送受信機を70台備え、必要に応じて使用している。

予約制で利用するグループ研究室は、壁のある小部屋であり、旧館では3室30席(6人、8人、16人)であったが、新館では3室46席(16人、14人、16人)となり、より多人数での利用が可能となった。

情報環境は、旧館では一部エリアであったWi-Fiが全館で利用可能となった。レポート等の作成に使用できるパソコン、検索結果や成果物のプリントアウトができる利用者用複合機も旧館では一部フロアへの配置であったが、新館では全フロアに備えた。今後の機器増設に備えた基盤環境も整備している。

長時間滞在を考えたリフレッシュ環境については、諸々の検討の結果、図書館前に別棟で学生滞在スペース棟が新設され、図書館利用者等の飲食可能な休憩場所として利用されている。また、この場所は学生による主体的なイベントや展示等の活動の場ともなる。

4.3.2 資料の収容・保存スペース

書架スペースは旧館・新館で面積の変化がほぼ無い中、収容可能冊数は約45万冊から70万冊に増加した。電動式集密書架の割合が大幅に増加したのである。旧館の書架棚板延長は16,337m(固定

書架13,659m、集密書架2,678m)で、固定：集密の割合は83.6：16.4であった。これに対し新館の書架棚板延長は25,009.88m(固定10,639.60m、集密書架14,370.28m)で、固定：集密の割合は42.5：57.5となり、収容冊数の半数以上を集密書架が占めることになった。

このような書架配置の中で蔵書をどのように配架するかは難題であった。検討を重ねた結果、洋書、和洋雑誌を全て集密書架に配架し、和書は発行年により固定と集密に分けて配架することとした。旧館では集密書架の規模が小さく利用上の支障は少なかったが、新館では、集密の同じブロックで利用者が重なり、先の利用者が資料を選び終わり通路から出るまで、別の通路を開けることができずに待っているという状態が頻出している。対策としては、学科の意見を聴取し、特によく利用する大部な資料(全集、シリーズもの等)は、発行年に関わらず可能であれば固定書架に移すという検討を開始しているが、固定書架スペースにも限りがあり根本的な対策は難しい。

キャンパス統合後、西生田図書館は保存図書館として使用することになっており、西生田が現在の蔵書収容力のままである場合、目白と西生田を合わせた収容可能冊数は約90万冊となるが、今後の蔵書増加を考えると十分ではなく、保存図書館への集密書架増設を要望している。

貴重書、和装本、マイクロ資料の所蔵環境の改善も新館計画の重要な要件であった。旧館においてこれらの資料は別置し出納利用としていたものの、その環境は一般図書と同様の環境であった。新館では、貴重書、和装本、マイクロ資料、それぞれに部屋が設置され、温湿度に配慮した所蔵環境を実現することができた。貴重書に関しては貴重書室脇に小規模ながら貴重書閲覧室も備えた。

4.3.3 管理・運営スペース

事務スペースについては、旧館では入口階のバックヤードにワンフロアで事務室があり効率的に全業務を行っていたが、新館では入口階(2階)により多くの利用者スペースを確保するため、2階

のバックヤードに十分な事務スペースを設けることができず、2階と1階に事務室が分かれた。

5. 今後の課題

図書館構想では、蔵書、施設・設備の充実とともに、学内他組織との円滑な連携や図書館員の適切な配置といった人的資源もふまえて効果的なサービスを実施すべきと述べられていた。良い図書館サービスのためには、蔵書(紙・電子)、施設・設備、スタッフの三者が優れていることが肝要であり、このたび整えられた施設の中で我々がどのようにサービスの向上を図れるのかが問われている。4月の開館以降、利用者からはさまざまな意見が寄せられている。施設の基本的要件は開館前に検証されていたが、開館してみなければわからないこともあり、利用者の声や日常の状況を関係部署と共有し適正化に努めている。新館開館後の利用者の要望・意識の変化を確認するため、利用者アンケートを実施することも必要であろう。

次の大きな任務としては、キャンパス統合時の西生田図書館から目白への蔵書移動がある。蔵書に加え機器類の移動も行い、全学部の利用者を迎え入れる2021年4月が新館としての真のオープンと言えるのかもしれない。

図書館はその全体をもって、本学の教育理念の実践の場であり学生の育成に寄与することを目指しているが、特に象徴的な場所として、現在、ラーニング・コモنزの利用促進に取り組んでいる。

ラーニング・コモنزは、各大学の考えにより、

図書館内、図書館以外の場所等、多様な場所への設置例があるが、本学では、図書館及び2021年4月新設の教室・研究室棟に設置し、ネットワーク型の「JWUラーニング・コモنز」を形成することとした。学修支援という共通の目標を掲げつつ、図書館のラーニング・コモنزでは学術情報をふまえた卒業論文・修士論文への導き、教室・研究室棟では国際交流・社会連携の支援という特色を出し、学生が実力を養う場となることを目指している。

大学は、知識の修得のみならず生涯学び続け主体的に考える力を育成するように、教育の質的転換を求められてきている。日本女子大学では創立以来、伝統的に自ら学ぶ力の涵養を重視しており、新しい図書館もその伝統を受け継いで、学生の成長をさまざまに支援していきたい。

(なかそね みどり)

参考文献・注

- 1) 上代タノ. “ごあいさつ”. 日本女子大学図書館創立60周年記念. 新図書館建築委員会. 日本女子大学, 1964, p.[2].
https://lib.jwu.ac.jp/lib/lib_setsuritsu1964.pdf, (参照2019-7-25).
- 2) 学校法人日本女子大学. “日本女子大学図書館[建築概要], 2019”.
https://lib.jwu.ac.jp/lib/newlib_kenchikugaiyo.pdf, (参照2019-7-25).

自学自動の伝統を具現化する知の拠点 —日本女子大学新図書館開館—

中曽根 緑(日本女子大学図書館)

日本女子大学は、創立120周年となる2021年4月、4学部、大学院5研究科の教育・研究を創立の地である目白キャンパスに統合して展開する。統合に向けてキャンパス構想が始動し、約半世紀ぶりに新図書館を目白に開館した。新図書館は本学の教育理念の実践の場という旧館のコンセプトを継承し、ラーニング・コモنزなど多様な学修スタイルに対応できる環境を整備した。新たな場で利用者の声に耳を傾け、学生の学修支援をはじめとしたサービス向上を図っていく。